都道府県別賞一等

備えがあれば希望も持てる

広島県　呉市立両城中学校　二学年

林田　秀治

「お母さんが倒れて、救急車で運ばれたんだよ！」

二〇二一年十二月二日、学校から帰ると叔母さんが待っていた。すぐに叔母さんの車に乗り込み、病院に着くと、そこには変わり果てた母の姿があった。

発症した病気は、脳卒中。脳血管疾患なんて、八十か九十歳くらいのお年寄りがなる病気だと思っていた。でも母の原因は、老人性の要素なんて一つもない、極度の貧血とバセドウ病によるものだった。

考えてみれば母はずっと無理をしていた。三年前の十一月、祖父が亡くなり、葬儀や死後の手続が終わった年末。安心したように、母はスイスの会社に再就職した。しかしその年明け、新型コロナウイルスの感染が広がり始め、母の担当予定だったアジアの国々は渡航規制が厳しく仕事にならなくなり、スイス本社と日本を行ったり来たりするようになった。コロナ禍で制限の多い海外出張、そして帰国している時は、家からオンラインでの仕事、家事、祖母の通院、僕の勉強の指導……。スイスとは八時間の時差がある為、夜中ずっと仕事をしていて、朝になってから疲れて寝てると、それを理解できない祖母が怒り、悪口を言っていた。祖母だけではない。世界を知らない人は、母に仕事を変えるよう注意したりもした。それなのに僕も、時間のない中、母が一生懸命勉強を教えてくれているのに言う事を聞かなかったり、母は一人で、たくさんの精神的ストレスを背負っていた。

「日本の女性は、もっと世界に出て仕事をするべき。日本はもはや後進国であり、世界に相手にされていない。私はそれが悔しい。」

母には野望があり、それを実現させる為のプランも持っていた。海外で仕事で活躍するという事と、もう一つは、僕を留学させたいという事だった。義務教育は日本で受けた方がいいから、その間は母一人で行き来して、基盤ができてから、僕を連れて向こうに拠点を移す。

母は子供の時から語学が得意で、本当は留学したかったが兄弟が四人もいて、家の状況からそんな事言えなかったらしい。だから自分の子供にだけは、金銭的な心配をさせてはいけない、と若い時からコツコツ貯金し、僕が小さい頃からいつも、

「お母さんは、秀治がどんな大学でも行けるように充分な貯金をしているよ。なんでも必要な物を買う事ができるし、やりたいスポーツだって留学だって、

なんでもできる。秀治はなにも心配しなくていいから。」
と言って僕を安心させてくれた。
　そんな母だから、やはり若い頃から生命保険に入っていて、今回の長い入院に対する給付金も受け取る事ができた。母は半年間のリハビリ病院での入院を終えて、今は訓練施設に入っている。その施設も後一カ月で退所する予定だ。それ以降は日本の医療制度の決まりで、リハビリは公的医療保険適用で受けられない。だから最後に、今回受け取った給付金の一部を使って、公的医療保険の効かない治療に挑戦するそうだ。それでダメなら、動かなくなった右手を諦めて生きていく、と。もし生命保険の給付金が入らなければ、母はその挑戦をしようとしなかったはず。備えがあれば希望を持つ事もできる。
　母は、海外で働く事をどんなに周りの人に反対されてもその信念を変えなかったし、僕はそんな母を誇りに思っている。でも、どんなに意思が強くて計画的な母でも、病気や死の時期は予測できない。僕が怠けたり弱っている時いつも、
「自分の敵は自分だけよ。」
と言っていたが、自分に負けない母は今、
「私の敵は病気だけ。一番怖い事は、秀治が大人になる前に自分が死ぬ事。」
と言っている。どんなに強い母でも病気には勝てないのだ。